

9 宇都宮城の釣天井

伝承地：本丸町

参考書籍：3・4・6・10～13・18～21・23・24・28



(宇都宮城本丸跡)

壬生を通して江戸に帰ったということと、その直後に幕府の重臣であった宇都宮城主本多正純が失脚し、横手（秋田県）に流罪になったことから作られた話といわれている。また、将軍は秀忠ではなく家光とするのが一般的である。ここでも家光を時の将軍として「釣天井」を紹介する。

3代将軍徳川家光の弟に、駿河大納言忠長という人がいました。忠長の幼少の時のお守役が本多上野介正純でした。正純は忠長を3代将軍に立てようと思っていましたが、家光が将軍になってしまい残念がっていたところ、寛永13年4月（1636）家光は、家康公の7回忌法要のため、日光廟に参詣することになり、帰路宇都宮城に一泊ときめられました。これを知った正純は、老臣、河村鞠負と謀って釣天井の仕掛けを城内に作り、家光を圧殺しようと大工を集めて秘かに、その工事にとりかかりました。この秘密が他に漏れることを恐れて大工を城外に出しませんでした。しかし、大工の中に与五郎という若者がいて、与五郎は名主の植木藤右衛門の娘、お稲と恋仲になっていたため恋しさの余り、ある夜、お稲に会うため城内を抜け出しました。釣天井の工事が完了すると城内では、工事の秘密が漏れることを防ぐために大工達全員を殺害し、城中の古井戸に投げ入れてしまいました。

しかし、与五郎の亡霊がこのことをお稲に告げてしまいました。お稲も恋しさの余り、この始終を書き残して、与五郎のあとを追って死んでしまいました。

この遺書を父、藤右衛門が発見し、お稲の遺書と釣天井の絵図面を持って、日光から江戸へ帰る将軍の行列中の伊井掃部頭に訴えたので、家光は宇都宮城には泊らず江戸へ帰り、危うく命拾いをしました。

「釣天井」事件の主謀者である宇都宮城主本多正純は、捕えられて処刑されたということです。

